高岡 Style

ものづくりの夢を育むまち

伝統工芸のまち高岡は、その文化や技術を次の世代に伝えるため、技術者の養成に力を入れてきた。「高岡市伝統工芸産業技術者養成スクール」には、伝統工芸に魅せられ、高岡の技を学びたい人々が県外からも集まってくる。高岡は、若き作家たちのものづくりへの夢を温かく迎え入れている。

高岡のものづくりの活気は想像以上

固い金属も、人の手で扱える

「小さい頃から、伝統工芸品が好きでした」と語るのは、荒井恵梨子さん。「人の手が触れて、つくられている感覚が好きです」。

栃木県から東京の芸術系大学に進学し、講座体験で金属が溶けているのを見て衝撃を受けた。固くて冷たい金属も、人が自在に扱えるという発見。荒井さんは、鋳金を専攻し、卒業後、高岡市の銅器関連企業に入社。「鋳物の仕事がしたいなら、高岡がいいと聞きました」。

同時に、養成スクールの受講を申し込んだ。

暮らしにうるおいを与えるもの

専門コースの受講期間は、1年。まず、つくりたいもののデザイン案を作成する。荒井さんが、ペンを走らせて描いたのは、小さな花器。

「高岡の銅器のお店で『一二三(ひふみ)』という、縁起のいい形があると教えてもらいました」。

上から、一本線、二本線、三本線と入るデザインだ。角のある回転体をつくってみたいと思ったという。

小さな花器にしたのは、「自分が日常的に使えるものをつくりたいから」。生活空間のなかで、楽しめるもの。それが、荒井さんのつくりたいものだ。

初めての地で、初めての技法

デザインが決まれば、図面を起こし、石膏で原型を製作する。続いて、鋳型をつくるが、この講座ではガス型を採用している。

「大学では、真土(まね)型が中心でした。ガス型の経験がなかったので、養成スクールで学びたかったんです」。

ガス型法は、ケイ酸ソーダを含んだ鋳物砂を使い、炭酸ガスを浸透させて固める方法。細かくて滑らかな肌砂と、大きめの粗砂を使う。

「今まで使った砂と固め方が違うので、どれくらい押したらいいのか、加減が難しかったですね」

ガス型の体験は、とても勉強になったと語る。真土型法は、型を焼成して鋳造する。ガス型は、焼く必要がない。「道具と材料があれば、いつでも鋳型が製作できますね」。

荒井さんは、すでに次のステージの出発点に立っているようだ。

荒井 恵梨子さん
栃木県生まれ
2012年5月より高岡市在住

原型を覆った肌砂に炭酸ガスを注入

回転体の型を切り抜き、調整する

鋳金から彫金まで自分の手でしてみたい

高岡という夢のゆりかご

高岡に行けば、金工を学べる

「彫金や鍛金は学んできたのですが、鋳金は初めて。だから、基本形から始めようと思いました」。

中島ゆり恵さんが、つくることにしたのは、茶道具の建水。シンプルで、やさしい形のデザインだ。

京都の伝統工芸系の専門学校を卒業したが、もっと金工を学びたかった。「高岡に養成スクールがあるよ」と、教えてもらったという。

早速、高岡に移住。鋳物メーカーに勤務し、スクールに通い始めた。専門コース(彫金)も受講している。

「いつかは、自分でつくった鋳物に、自分で象嵌をした作品をつくってみたいですね」

中島 ゆり恵さん
大分県生まれ
2012年2月より高岡市在住

デザイン画から着色まで体験

彫金・鍛金が最初から金属と向かい合うのに対して、鋳金は、原型づくりからいろいろな素材を扱う。

「でき上がりに向かって、紙から木、石膏、砂と、素材を置き換えていく感じですね。難しいけれど、面白いです」

彫金・鍛金と、全く違う考え方に、最初は戸惑ったが、鋳物でも、いろいろな方法があることも知り、視野が広がったという。

「着色は、まだ使ったことがない※オハグロにしたかったんです」。原型から着色まで、鋳金の工程を体験した初めての作品ができた。

高岡に来て、養成スクールを受講して感じたことは、「若い人たちが、伝統産業を活かした新しいものづくりに、とても意欲的」ということ。「ものをつくる前に、用途をデザインする発想がいいですね」。

荒井さんも、「思っていた以上に伝統産業に携わっている人が多く、活気があるなと思いました」と、語る。「若い作家や職人が、日常的にコミュニケーションをしているのが魅力。これから面白くなりそうです」。

養成スクールを通して、同じ道を歩もうとする仲間たちと出会い、さらに新しい出会いにつながる。高岡は、「技」を教えるだけではなく、「人」とのつながりや刺激という、未来への宝物も教えている。

ものづくりの未来へ向かう

荒井さんが興味を持つのは、新しい合金。これまでと違う比率でつくってみたいという。「着色した時の色も違ってきます。合金の幅を広げたいですね」。

また、ものづくりでは、「奇抜なものではなく、自分の感覚で使えるものをつくりたい」と話す。

中島さんは、「自分の創作スタイルを見つけたい」と語る。すでに、彫金・鍛金の作品を、工芸都市高岡クラフトコンペに出品したり、若手作家が展示販売するクラフトマンズギャザリングに参加するなど、作家としての活動も行っている。

養成スクールだけでなく、発表や評価の機会があるのも、夢を育むまち高岡の力。「ものづくりが、しやすい環境」に、若い夢が集まってくる。ものづくりの未来へ。その一翼は、確かに高岡が担っている。

※オハグロ　酒や食酢に細かい鉄屑を入れて熟成したオハグロ液を使い、つやのある赤褐色を出す。

原型に肌砂をかぶせ、全体を粗砂で埋める

型を取り付け、軸に石膏を塗り重ねていく

「高岡市伝統産業技術者養成スクール」について詳しくは、こちらまで

http://www.suncenter.co.jp/takaoka/info/school.html